
魔人奮戦記「嵐の予感」

葩鵝龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人奮戦記「嵐の予感」

【Nコード】

N7358M

【作者名】

葩鵝龍

【あらすじ】

異常気象により異界と下界に裂け目ができ異界人達が降臨し人間との交流が始まり人間と異界人と

混血が増え、平和の時間が続いていたが人間との共存を望まぬ者が現れて水面下で共存を望まぬ者が

集まり勢力を広げ共存望む者達と戦いが始まり8人の異界人との混血の者達の精鋭が異界の長達に選ばれ世界統括をもくるむやからと
いつ終わるかかわからぬ戦いの幕開けの始まりだ

嵐の予感

西暦2100年異常気象のため人間の大半が滅び異常気象によって魔界と下界の境に亀裂がしよじて異界と下界との行ききが可能になって異界人との交流が始まり異界から来た者と人間が共存していた。人間との交流が深まるにつれて妖精、魔神、魔獣、幻魔などの人間との混血である魔人と呼ばれる者が増え始めた。幻魔と人間の混血である降魔靈慈は巨大な魔力と人間よりも3倍の筋力と身体能力をゆうしてた。25才になるまで平和だったが人間との共存を嫌がる異界人達が世界統括をするため争いが始まった。魔神と人間の混血の螂牙暝一は「反対分子特殊調査隊」

の経営する一般企業に入社し異界人街に潜入搜索を命じられていた。暝一と友人だった降魔靈慈は『反対分子特殊調査隊』とは無縁の一般企業に入社していたが人間との共存を反対する異界人の中に学生時代親友だった。螂牙暝一の率いるメンバーが普通の人間を呪い殺したなどのニュースが連日報道されているのを見て暝一に電話し夕方5時にナムル西地区にある空き地で待ち合わせしてニュースで報道されたことが本当かどうか聞いてみた。「暝一なぜお前が共存反対派と行動して人間達を呪い殺したか、どうしても聞いてみたくて呼び出したんだ」

「世界統括の首謀者を突き止めるために共存反対と行動をともにしている、それに呪い殺した人間は蘇生の魔法で生返えらせたよ」「半信半擬だが、少しは世界統括の首謀者な顔は見えて来たのか」「いや、反対派どもと一週間ほど行動してるが何もみえてこないよ。わかったことがあつたらまたこの場所でまた会おう」と誓いをたて別れ靈慈は『反対分子特殊調査隊』に勤務する妖精族の血を引く氣

龍靈魔と神魔慶子は暝一と靈慈の友人である、情報をえるため『反対分子特殊調査隊』の近くにある5階建てのビルの3階の喫茶店『紋羅』で彼女達と待ち合わせし生ビールを頼み窓際の席で靈魔達を待っていた。『反対分子特殊調査隊』は人間との共存を望まない異界人との混血の人間達の犯罪を取り締まるのが主な仕事だが雑務的な仕事もこなす。ペットの失踪調査や庭師的な仕事などである。例えば犬の失踪調査などは意外な事件にぶつかるともある以前「飼っていた犬が逃げたので調査願います」との依頼があったので依頼主に犬の写真をもらい聞き込みをしていた時異界人地区のカルト教団のアジト前で写真の犬が吠えいたとの情報えて異界人街地区に向かった。確かに写真の犬がカルト教団の前で吠えている、依頼主のところ连接到帰ろうとした時だ教団のアジトが轟音ともに爆発した。

数10名の死傷者がでた、調査した結果だとカルト教団は人間共存反対派だったらしく、人間共存派のメンバーに世界統括の首謀者が通つてるとの情報が入り爆破魔法を得意とする魔神との混血の墓場魔榔という人間が攻撃したということを確認したので逮捕した。

『反対分子特殊調査隊』はそのような事件に遭遇することもあるので雑務的な仕事もこなしている「よっ、靈慈待たせたわね、なんのようだい」「暝一のこと話があつてね、慶子とは一緒じゃないのかい」「慶子は共存反対派と思われる民家に庭の手入れしにいつてるよ」「そうか庭の手入れしながら共存反対をはってるわけか」「暝一の話聞かせて」

「暝一が人間共存反対派のメンバー率いて人間を呪い殺した、ニユースみたよな」

「みたわよ、というよりは私達の仕事だし、慶子と組んで調査してるけどそれがどうかしたの」「昨日、暝一と会って聞いてみたら、世界統括の首謀者を突き止めるために人間との共存に反対する異界人達と行動してるんだってよ」「嘘でしょ、なんで暝一が危険をおかしてまで反対派のメンバーに参加してるわけそれに納得いか

ないわ。首謀者を突き止めようとしてるなら人間達を呪い殺す理由はないでしょ」「確かに呪い殺したが蘇生の魔法で生返させたんだと、おそらく反対派を信用させるためじゃないかな」「うーん世界統括の首謀者を突き止めるのは私達の仕事なのに…でも、まってそっういえば私が調査隊に入った時に潜入調査を専門とする反対分子特殊調査隊のシークレット機関があると話しを聞いたことあるの、日頃は反対分子特殊調査隊の経営する一般企業で働いて潜入調査の依頼があれば長期休暇とって潜入調査に従事してる、調査官がいると聞いたことがあるわ」「ということは暝一がシークレット機関の調査官の可能性があるわけだ」「暝一に聞く必要があるわね」早速霊魔は暝一の氣を探す「みつけたわ、霊慈行くよ、私の手をもって」瞬氣で一瞬にして異界人街の30番地区到着した、暝一は急に現れた霊魔と霊慈に驚く「なにしに来たんだお前達」

「単刀直入言うが暝一反対分子特殊調査隊のシークレット機関の調査官かどうか聞きたくてね」「もしシークレット機関の調査官だったとしても教えるわけいかないなあ」「わかったわ、もしあなたがシークレット調査官だったとしたら世界統括の妄想描いてる首謀者の情報教えてもらおかと思っただけ無理そうね」「お前も反対分子特殊調査隊の端くれなら自分で調査しな、一つだけ教えところ、この界限には100元払えばちよつとした情報教えてくれる者がいる。探してみな」「探してみるわよ」早速霊魔は情報屋を探すためちよと古びた純中華様式の居酒屋を尋ねてみた「この辺りに情報屋がいると聞いたんですけど」

と40代半ばと思われるマスターに尋ねてみた「どんな情報が欲しいんだ」「人間との共存に反対してる異界人の組織なんだけど」「それなら1人知ってるよ。だが平均の情報料の倍以上はかかるがいいか」「かまいません」「あそこにちよつとシヤレた帽子をかぶった初老の男が酒のんでるだろ」「はい、そいつに聞いてみな」初老の男に近付き霊魔が声を掛ける「ちよつとお聞きしたいことがあるんですけど」「なんじゃ」「人間との共存反対派の組織のことなん

ですが：」「そのこと話す前に飯おごってもらいたいんだがいいか」「かまいませんよ」初老の男はマスターに声を掛け「鯨定食一つよろしく」（鯨定食一皿1500元するのに出費がかかるわね）

10分程して初老の男の席に届く「お待たせしました」「久しぶりじゃなこんな高級なの食べるのはお嬢さんありがとう」「えーと情報よろしくね」「人間との共存の反対派組織は異界人街だけで10組あつての一番大きいのが端蛇魔光の組織での、世界統括の妄想を実現するためなら手段を選ばぬ組織での、こいつらを総括してるのが暝羅霊崩で世界統括など妄想を掲げている」「暝羅霊崩のアジトとかはわかりますか」「知らないが前噂があつての異界人街の78番地区の地下に戦争の時に使われた大きな防空壕を利用したアジトがあると聞いたことはあるが今も使われてるかはさだかでないのだ、一つ頼みたいことがあるのだが君達の仲間にいれてもらえんかの謀報官として雇ってくれると嬉しいのじゃがの今年で60になるのだがワシは魔神の血を引く人間じゃから攻撃魔法や攻撃補助の魔法も使えるし重宝すると思うのじゃがどうかの」「いかに魔神の血を受け継いでるとはいえ民間人を巻き込むのは：」「じゃ俺の方で毎月15万円で雇うことにするよ」「いいけど大丈夫かしら」「ありがとう青年よ！まだ名前いつてなかったのワシの名は弧月魔太郎ていうんだよろしくの」

「弧月魔太郎、何処かで聞いたことあるような」「あつ、思い出したぞ30年前に大魔導師として活躍してた方ですね」「ワシのことを知つとる奴結構いるもんだな。あの頃ほど強大な魔力は今はないがよろしく頼むよ、霊慈君」「はい、魔太郎さん私のほうこそよろしくお願いします」霊魔は魔太郎達と異界人街78番地区向かった。異界人街76番地区から車で1時間ほどかかった。大型ショッピング店はなく小さな店が10件ほどしかない町でそこを抜けると何もないところで後は背の低い木々がある雑木林と平原だけだった「魔太郎さん、平原に点在する小さな建物は何ですか」と霊魔が尋ねると「あれは地下に通じる出入口じゃよ降りてみるか」「はい」

出入口の扉には六芒星のような紋様があり魔太郎が手を触れると光輝き扉が開いた「えっ、なんで開いたの」「この扉はある一定の魔力を照射すると開く仕組みになってるんじゃないよ。それぞれ光、闇、火、風、雷、氷の6元素を操れる者がこの扉を開けることができるんじゃないよ。妖精族の血を引くお嬢さんも開けると思うがの」「えっ、私は闇の魔法は知らないのよ、勉強中ですから」

「あっ、一つ忘れとつた対応する元素の扉を開けると闇、光、火、風、雷、氷それぞれの属性の異界の者達が現れるらしいからの気よつけるのじゃの」構内に入ってくると異界の住人が数体現れ火属性の魔法で攻撃して来た一撃目をなんとかかわし、霊魔が詠唱する間もなく次ぎの攻撃がくる「厄介な奴等ね」攻めあぐんでると霊慈の氷の魔法「凍て付く矢が放たれ一体目が凍り付くそこに魔太郎の爆破魔法で粉々に砕け散る。そして2体目の炎の矢が霊慈を襲うそこに霊魔の「風坊壁で押し戻し魔太郎の氷の鉄墜が異界の者の頭上より攻撃すると凍り付く今度は霊慈の爆炎衝で攻撃粉々に砕け散り細胞もろとも焼き付くす、奥に進むに連れて異様な緊迫感を感じ1番奥の最後の扉を開けるととつもない巨大な気を四人は感じたが姿がみえないすると後ろから雷属性の魔法が魔太郎の頬をかすめる。「よくここまでたどり着いたな異界人との雑種の者達よ」

と何処にいるのか部屋中にノブとい声が響き渡る。霊魔が氣を探り瞬氣の魔法で四人が一瞬にして移動する。「あなたがここの主」「驚いたぞ妖精族の血を引く者よ！一瞬にして私のところに移動してくるとはね。残念だが私の元へ来たいじよう生きて帰れると思うなよ」いきなり男の雷撃魔法が4人の頭上から雨のように落ちてくるなんとかギリギリで四人はかわしたが次ぎに火属性の魔法が四人の背中側に回り込むしかし霊魔の風の坊壁で押し返すが男の風の壁で受け流し、

今度は男の氷の龍爪が四つに枝わかれし四人を襲うが魔太郎が地面に手をつくると土の柱が現れ防ぎ霊魔の雷針の魔法で男を襲い男の動きを一瞬止め魔太郎の氷の龍爪が男の細胞を凍り付かせ霊魔の爆炎

の雷衝で攻撃男が粉々になった。「ふう、なんとか倒したみたいね」そして最後の扉を開けると降りる階段あった。下に降りると敵の気配がまったくない「どういうことかしら」「取り敢えず先進んでみようぜ」霊慈の後を霊魔と魔太郎がついて行くと左と右に六芒星のマークが霊慈が風属性の魔法を唱え右の扉を開けると小さな小部屋だった壁には風神の壁画かいてある壁を叩いてみると壁が崩れ眩い光がさす「出口かのう」

と霊慈に尋ねるが黙って人が立つて入るくらいに壁を崩し奥に入るとこけが光をはなっているらしく奥に進むと扉があった。しかし何の気配もなく先進むと今度は雷神の壁画が書いてある部屋だ。

頭上で雷鳴が轟き四人を襲って来たなにかかわすと声がする「久しぶりね。霊魔、魔法大会のけりをつけさせもらうわよ」「驚いたわ、華風こんなところで会うとわね」「知り合いかい霊魔」「そうよ、1年前の魔法大会のときこんてぱんにやらたくせに愚かよ華風」「1年間呪詛のしたで修行したお陰であの頃よりはパワーアップしてるはずよ」「なに、呪詛じゃと…」「30年ぶりかのお、魔太郎」

と四人の後方から声が聞こえ暗闇から現れる「どつりでさつき妙な気配を感じてたがお主だったとはのう。ワシに30年前負けた奴めワシに勝てると思っておるのか。呪詛」そついうと魔太郎の光爪の魔法が呪詛を襲う「ほう魔力は落ちとるようじゃがなかなかだの魔太郎」「霊魔行くよ！」「氷の柱が霊地面から現れ霊魔を襲うなんとか瞬氣の魔法でなんとか逃れる！そして昔の大魔導師の2人と妖精族随一の魔力をもつ2人の争いが始まった。

四人の戦いの傍観者となった霊慈はどうしたものか考えあぐんでると暝一の声が聞こえてきた「暝一どこにいるんだ闇の扉開け地下に向かうところだったんだかともない魔力のぶつかりあいの気配感じてお前の心通して話かけたのさ」「今な霊魔と華風と魔太郎爺さんあと呪詛とかいうの戦ったてるとこさ、こつちにはいつ頃来れるんだ」「お前のところから1キロ離れたところにいるから闇の属

性の弱い異界人を倒しながらだから20分ほどかな」「そんなかか
るのか」「しようがないだろう霊魔と違って瞬気の魔法が使えるわ
けじゃないからな」「おつとあぶねい」「どうしたちよつと魔法が
当たりそうになってな」「そうか、俺が来るまでなんとかしのげ」
「華風地上にでるわよ、ここじゃ大切な傍観者が怪我しかねないか
らね」「大切な傍観者…あつあのイケメン男ね」

「呪詛俺達も地上にでるぞ」「地上でトコトンやりたいようじゃの」
「おい霊慈4人の気配が消えたな、なんだとんでもない魔力の持ち
主達の気配が後ろから感じる」光の矢が暝一に襲いかかる「どは、
あぶねい、胸貫かれとこだったよ」「暝一大丈夫か、なんとかさけ
れたよ」「おい、その若造巻き込まれなくなったら早く地下行
け」と魔太郎が声をかけると慌てて扉を開け中に入ると早速闇の属
性の異界人の雑魚が5体ダークピクシーが現れたが暝一の光の魔法
で5体を瞬殺し先に進むと今度ダークエルフ3体が現れるがまたも
瞬殺だ。次ぎの扉の前に行くときダークドラゴン1体が行くのをふさ
ぐ(何こんなところにダークドラゴンだと厄介だな)「この扉を通
り抜けたかったら俺を倒すのだな魔神との混血の人間よ」そういう
とダークプレスで攻撃してくる。暝一は光の壁で防ぐ「なかなかや
るでわないか、だがこの攻撃はどうか」ダークドラゴンの姿が前
から消え後ろからダークドラゴンの闇の波動が襲ってくる魔法詠唱
もかわすこともできずまともにくらったかみえたが突然霊魔が現
れ光の波動で押し返しダークドラゴンにまともに当たり消滅した。
「あぶなかつたわね。暝一」「お前：確か誰かと戦つてよな」「ダ
ークドラゴンのとんでもない魔力を感じてちよつと華風にいつて一
時戦線離脱してきたのよ。戻るね」
霊魔はすくと消えた。「お待たせ華風続きやるわよ」「今度こそ戦
線離脱はさせないわよ、でもいつの間に龍族が地上降り立ったのか
しら、あいつらとまともにやりあつたら私達でさえ苦労するのに厄
介ね」「そんな無駄口叩くひまないんだからね。今度こそ決着つけ
るわよ」

地下では暝一がやつと靈慈のところに着した。「ずいぶん時間かかったな」「それがダークドラゴンとやりあってたら時間かかってな」「何、ダークドラゴンだと龍族のあいづらがなんでこの世界に降りてきてるんだ。お前1人で倒したのか」「いや、苦戦してる時に靈魔が現れて倒した」「あの四人はまだ戦ってるようだな、取り敢えず先へ進もう」雑魚どもを倒しながら光の扉の前にきた「なんかあの四人より強い魔力を感じるぞ」地上にいた四人も戦いをやめ自分達より強力な魔力の持ち主の気配を感じ瞬氣の魔法で暝一達のところに見れた「四人ともどおしたんだ」と暝一が聞き四人を代表して靈魔が答える「私達を凌ぐ強力な魔力の気配を感じて慌てて駆け付けたのよ」暝一が扉を開けると邪神クトウルが現れた「ようこそ異界人との混血の人間達よ。おまえらにちよつと聞きたいことがある」「何でしょうか」と呪詛が答える「この世界で何が起こつておる」

「実は世界統括もくるむやからが現れたので我ら6人で滅ぼそうかと思ひまして」「なるほどの、だがお前達で倒すことはけして叶わぬ。お前達のレベルでわなワシらの力を結集してもやつと互角に渡り合えるほどのもの達がこの世界の各都市散らばっている」そういうと姿を消したが数秒後クトウルの巨大な体現われる「うわー、そんな巨大な体で急に現れたらびっくりするでしょ」と靈魔と華風が言う「お嬢さんたちに渡すものがあつたのを忘れたよ、最近物忘れがおおくてなあ、我が足で作つた鞭じゃ、こいつは敵の魔力を吸収し、うまいことすれば敵の動きを一時的に止めることもできる重宝する武器だ」クトウルが2人に鞭を渡し再び消えた。「いいものもらつたの2人と」と呪詛が言う、再び6人で先に進むと風の扉につく開けて中に入ると「ようこそ異界人との混血の人間よ。我は幻魔タロロツクというものだ、世界統括もくるむやからと戦うそうだな、あの者達の魔力は異界にも災いもたらす力の持ち主達だお前達6人では無理じゃ、仲間にしとかぬ者がある。ワシの念写で浮かび上がった顔写真渡しとこう。その写真の2人は龍族の血を引く

者達だ雷龍勁一と風羅暝だ。この地下の最深部に行くと三つの扉を通り抜けた奥の広間にいる。それと幻魔の血を引くお主にこの剣を渡しとこうこの剣はヒト振りすれば閻属性をもつ異界の者を一掃する剣だ」霊慈に剣が渡され姿がすくと消えた。次ぎに氷の扉を開けると魔神オデインが現れた「今度は魔神オデイン」と華風がいう。「異界との混血の人間達よ我はオデインだ。魔神の血を引く霊慈お前に渡すものがある。ワシが持つてる槍と同じものと、無双破斬槍だ。受け取れ！」そういうと消えた。異界の雑魚を蹴散らし風の扉に到着すると待構えていたように魔獣ケルベロス現れた。「ようこそ異界人との混血の人間よ。我はケルベロス、妖精族の血引く霊魔よ。お主の従者に魔獣の血を引く者がおつたの。そ奴に我が爪で作った破碎爪を渡しといておくれ」「はい、分りました」一行は魔獣ケルベロスと別れさらに進む。雷の扉を開けると誰もいなかった。「しかし驚いたの異界の猛者たち4人も現れるとは」と魔太郎がいう「本当ね、まさか邪神クトウルが妖精族の私達に足で作った鞭をくれるなんて早く使ってみたいなあ」とワクワクしながら華風が霊魔に言う「ようやくためし打ちする相手が現れたみたいよ」と言うのと妖精テイターニアが現れ「やるよ、霊魔」華風が攻撃する「キヤー、痛いなにするのよ」テイターニアの怒りの雷が華風に当たる「パワー半分以下に抑えてあるから生きてるでしょ、気絶したふりしない妖精族の血引く人間よ」「すいませんテイターニア様とは知らず攻撃してしまいました」

「いいわよ！それくらい元気がいい方が妖精族の血を引く証、妖精族はかちきでじゃじゃ馬の子が昔から多いからね。私も若い頃からかなりのじゃじゃ馬でしたかね」「そんな風みえませけど」「あの私達に何かようですかテイターニア様」と霊魔言う「様はつける必要はない、話に夢中になってしまった。あなた達に大治氣の魔術書を渡たそう思ってたの」「大治氣といえば体力を完全に回復す魔法ですよね」「そうだお前達は攻撃魔法にはたけているようですが回復系魔法一つももっていないあいつらと戦う前に必ず会得しなさい

い分りましたね」「霊魔と華風は同時に「はい、分りました」「期待してますからね」そう言うとお消えた。「ふっ、ふっ、あなたも馬鹿ね、ティーターニアに鞭を打ち込もうなんてね」「だって、昔両親が話してくれたことあるのよ、妖精ティーターニアは魔法攻撃には強いけど物理攻撃に弱いて聞いたことあるからクトウルの鞭でためしに攻撃したくて」「あんたもしかしてティーターニアだってきずいてて攻撃してたの馬鹿ね。私本当にティーターニアだと知らないで華風が攻撃しかけたのかと思ってた、愚かね。怒りの雷フルで受けたら死ぬわよ、雷属性魔法の最強なんだから」

さらに6人は奥に進むと扉があり入ると地下に続く階段があった。下に降りると大きな広間があった。

6人は雑魚の異界のものを次ぎから次ぎへと瞬殺し、先に行くと三つの扉があった。

「ここが幻魔タラツコスだった扉のようね」6人は真ん中の扉を開け先進むとまた扉が3つあり右方向にでてさらに奥に進むと道が二つに別れていて左の方に行くと真直ぐの道だ。たいした敵にも会わずただひたすら真直ぐに続く道だ1時間ほど歩いたが広間にでそうにもないただひたすら同じ景色が続き本当に先進んでるのか疑問に思うくらい変化のない道だ。「なんか未だ龍族の2人の気配を感じないのだがこの地下ないのかな？霊魔が2人の気配を感じたら一瞬で行けるのにな」と霊慈が言う「確かに変よね、1番最初の三つの扉の真ん中を通って1時間ほど経つのにたいした敵もでないし奥行けば行くほど異界の雑魚達の出現率もドンドン下がって気がするし、この単調な風景と道歩き続けていると方向感覚も思考も停止して気が狂い兼ねないわ」「冗談よせよ！気がふれたお前が暴れたりしたら止める大変そうだしついで華風さん、爺さん達まで気がふれたら暝一と俺と2人で4人相手だったらてにおえなくなる頼むよ、4人とも」「心配には及ばんよ！気がふれたりするもんかい、のおー呪詛よ」「心配せんで大丈夫じゃよ、華風もそうじゃろ」「アッ、ハッ、ハッー心配しないで霊慈さん」「霊慈、お前も気ふれんなよ」

「心配しなくいいぜ！瞑一」ようやく6人は広間に着くと龍族の血を引く2人と会った。年のころは2人共20代前半で身長は170cmほどだ「よくも我が父ダークドラゴンを痛めつけてくれたな妖精族血を引く麗魔よ」「しようがないでしょ、下手したら瞑一君が死ぬところだったんだから」「お兄さんその話しいいわよ父さん死なずにすんだんだからさ」「確かにそうだが…世界統括を企む連中倒したら俺と勝負しろよ、麗魔」「わかったわよ、ここから出るからこつち来なさい二人とも」

そう言うのと瞬氣で地上にでた。「結局地下世界には世界統括を企む奴らのアジトはなかったわね。龍族の血を引くお二人さん何か心当たりない」「いや、無いなあ、あんたらと会うまで妹と二人で情報屋の情報もとにあっちゃこつちや行ったがどれも外れさ、麗魔さん」「反対分子調査隊」情報網屈して、なんとか、ならないかい」「今、衛星使つていくつかの廢墟をピクツアップしてるからそろそろ私の携帯に情報送られて来る頃よ、ちょうどメールがきたわ、こつちから5キロ先の東カロイ地区にある。塔ノ沢総合病院みたいね、邪悪なちよつと大きめのパワーが10人程集まつてるわ。行くよ！」「再び麗魔は瞬氣を唱え一瞬で塔ノ沢総合病院廢墟の入口についた。「麗魔たいしもんじやの我等8人を5キロ先の場所に一瞬で移動できるとはわしらの若い頃思い出すぞ」「それは妖精族血引く人間の華風も含め1、2 争う魔力の持つ人間ですしね」塔ノ沢総合病院に入るとまず一階の各部屋を探索するがうっざざたい雑魚の異界の者達ばかりが出てくる。麗魔が巨大な魔力持つ者の氣を探すが何故か感じない。一体あの巨大な魔力を持った奴等はどこにいるのだろうと頭を捻る。一旦一階の探索を終わらせ2階にあがり探索するが雑魚ばかりだ。するとどこからか光の矢のような物が麗魔の背後に近づいてくる「麗魔後ろ！」振り向いた瞬間肩をかすめた。「大丈夫か、なんとかかね。癒しの光を傷をふさぎたまえ」見事傷がふさがれたティータニアさんありがとう感謝の意をを空に向かって祈った。

「たいしたものね」異界のティータニアは彼女達を眺めいた異界のティータニアは彼女達を眺めいた（さすがに異界の長達が認めた人間達ね）

「もうどこにいるのかしらね」麗魔は苛立っていた。「さっきまで感じた大きな魔力の持ち主はどこに行ったのだろう」零慈も思っていた。

8人は5階はまで探索したが心配がなく一旦休息することにした。

魔人奮戦記「未探索地の戦い」(前書き)

78地区の地下の防空豪跡の未探索地での戦いがメインです。

地下3階に進む前の会話で終わる第2章です

ちよつと色っぽい場面と

15才以上に触れない程度の残虐な文章表現もありますが一般向けで公開させていただきます。

魔人奮戦記「未探索地の戦い」

麗魔達は地下一階の未探索地を進むと敵にも遭遇せずに人が明に
いると思われる大理石で囲まれた
広い通りにでると5名ほどの話し声が聞こえてきた

「異界人と共存派のメンバーこの階に向かっている話し聞いたか」「
ああ、聞いてたよ、今、俺の心をとうして伝わったよ」
麗魔は驚きを隠せなかった

「なんで私達がここに向かっているのを知っているのかしら」「確かに
変だな、誰か密告者がいない限り、わからない外だが…」と霊磁が
メンバーの顔を見渡す「知られてるいるなら強行突破するしかない
わね」と華風が言う。

敵も気づいたらしく雷系の魔法が7人の頭上で枝分かれし襲ってく
る、麗魔は防御魔法を発動させ、敵に弾き返す、敵も防御魔法で雷
系魔法を吸収した。5名の敵が一瞬にして麗魔達の前に立ちほだか
り一番若い男が風羅に火炎系魔法で反撃するがかわし一挙に間合い
を詰め『破衝拳』をがら空きのボディに叩き込むと1メートルほ
ど吹っ飛び壁に頭も打ちつけ失神した

「やるじゃない、さすがに1年前の世界格闘大会で優勝した風羅さ
んね」

「私のこと知ってるの、名前はなんて言うの」「阿邪て言うのよ、
知らないでしょうね」「確か準決勝の前に龍族の血を引く男に負け
た人ね」

「あの時から一様あなたをマークしてたから覚えてるわよ」「それ
は光栄ね、あの時とは違うわよ」

「そういうといつの間にか、風羅の1メートル前に移動していた」

なるほどね、でもあなたには負けないわよ」といい左中段回し蹴りを放つ

阿邪は一步下がり膝でガードそのまま右足を下ろし、風羅の胸の辺りに掌底を叩き込む

風羅は1メートルほど吹っ飛ばされ尻餅をつくが立ち上がり右ストリートで阿邪の顔面を狙う

阿邪は左足を半歩すすめて風羅のサイドに回り込み掌底でガードし膝蹴りを風羅のみぞおち付近に叩き込む

風羅は余りの衝撃に胃のないようぶつを吐き出しそうになるがこらえ少し距離を置き『気合い砲』を放つと阿邪が吹っ飛ばされる「さすが格闘大会の優勝者でも負けないわよ」

阿邪は『雷崩破』で反撃し風羅は体が痺れ一瞬動けなくなったところへ阿邪の『破衝』から五指をまとめて衝撃を一点に集中させる『爪破』からの連続技が炸裂なんとか堪え

『空烈斬衝』で反撃すると目に見えぬ、空気の刃と衝撃が阿邪を襲い道着が破れ、胸辺りに布の切れ一枚残し裸同然の姿になり余りの恥ずかしさに赤面してるところへ

風羅の『爆裂拳』から『百烈掌』の連続技が阿邪を襲い1時間に及ぶ戦いに終止符が打たれた。

敵の男が自分の上着を阿邪に着せ「よくも俺の恋人、阿邪を恥ずかしめたな許さんぞ」

と言う

よくみると風羅の道着も肌の露出は少ないがかなりボロボロだ、霊磁は自分のマントとを風羅に着せて「お前の相手は俺がするぞ！零牙」「なんでお前が俺の名前を知ってる」

霊磁の顔をまざまざとみて頭を捻りながら考えている

「お前は2年前の魔道大会の3位決定戦で俺に負けた霊磁か、あの頃よりは少しは腕をあげたか」と言うと霊磁の視界から姿が消える後ろから『炎の槍』が霊磁を襲い頬をかすめ一瞬焼けるような痛みが走る
が構わず霊磁は『ダークレイ』の魔法を放つ

零牙の肩をかすめると零牙の肩の辺りが腐食し始める「随分邪悪のな技だな」

といい手の平で肩を押さえると傷口が塞がれていた「なるほどホーリーレイの癒しの魔法かさすがだな」

しかし今度はどうかな「そう言うと『炎龍破』で攻撃一筋の炎の線が零牙を襲いかわすがリターンして零牙の腕を貫くが『ホーリーレイ』
の魔法で傷を塞ぐ

「俺を倒したいなら心臓を貫くのだな」「そんなに死にたいか、な

らば容赦せぬ、風よ、いかづちよ、大地の力よ、我に集い、敵を倒せ」すると一瞬にして上空に光の球ができ

大地が裂けてとてつもない向かい風が零牙を襲う防御魔法を唱える間もなく光の球に包まれた。

光の球が消えると零牙の姿も他のメンバーの姿もなかった【ちよつと威力を抑えればよかったかな】

と心の中で思っていると「ちよつと霊磁やり過ぎよ」「どこからともなく麗魔とメンバーの姿が現れた

「敵は倒したか」「いや零牙がダメージ受けてるけど他は軽傷追ってるだけね」「そうか」「よくも零牙に怪我させてくれたわね、私許さない」と妖精族の血引くと思われる

長い黒髪の20代半ばの女がいきなり氷系の魔法攻撃をしかけてきた霊磁はかわすと辺りが一瞬にして凍りつく

「ここは私に任せて、あの女とは因縁があるの、零那行くよ!」と華風が言う「華風あんたが相手、裏切り者め」

華風はもとは共存反対派の一端『アルソアニ』のメンバーだった、華風は一派のリーダーだったが霊那とリーダー争いをしていた。

1対1の勝負をし華風は戦いに負けて『アルソアニ』を出て流浪の旅にでる

龍破山の空き家で寝泊まりし空き家から数10メートル離れた温泉

に入っていると妙な視線を感じ裸のまま視線を感じるほうに近づくと黒い影が跳びあがり華風の後ろに回り込む

たわわな両乳房を触ろうとしたが跳びあがり雷系魔法を放つと初老の男が倒れた。

華風は呪文を唱え魔法力を帯びた服が出現し着るとしばらく初老の男の様子みてる

と「お姉さん随分刺激的な格好じゃのう」と下からみやげていた

華風の服は上は黒のベストに細い白帯び結ばれ下は膝より20ほど上の丈の短いスカートはいていた、このエロ爺、雷よ！悪しき者に正義の鉄槌を！

雷鳴と共に雷が初老の男を襲うがかわし華風は身動きが出来なくなっていた

「エロ爺！これから私に何をするき」「何もせんよ、何かして欲しいのかの、ならば期待応えてやるぞ」「お爺さんの言うことなんでも聞くから私を強くして」

妙に色っぽい声で言う「そんなにわしに強くしてもらいたいか、良からうと言うと華風の動かなかつた体が動くようになる

わしのすべての術を御主に教えてやろう、調度弟子を探しに旅に出る予定だったからのう、これも神のお導きじゃ、わしは呪詛じゃ、よろしくのお

「華風です」と言う

これが呪詛との出会いと零那の因縁だ。

「何ぼーとしてるんだい行くよ！華風、火の力よ！我に従え」炎が回転しながら蛇のように動き華風を襲う

「水霊よ！我に力を与えよ」水が回転しながら水と炎の相反する属性のぶつかり合いだ、世界中に響き渡りそうな地が裂ける、音がし霊魔達は巻き込まれそうになり場所を移動する。

二人の巨大な魔力のぶつかりあいは30分ほどでけりがつき零那は戦闘不能になった。「今度はわしらが相手だ」呪詛や魔太郎と同年くらいの男達が立ちほだかる

「こいつは驚いたの昔、魔法大会でわしらに負けた釦魔と鍍那か、懐かしいのお」と魔太郎が言う「あの時のけりをつけてやる、魔太郎」と鍍那が言う
「でわ、行くぞ」

鍍那と釦魔の闇と光の術が魔太郎達を襲うがかわし、4人の老兵達の地球を揺らすような巨大な魔力のぶつかりあいだ

「破ー、これでも喰らえ」と釦魔の魔力の凝縮された黒い球が魔太郎に放たれる

しかし魔太郎の光の球が黒い球を吸収、増幅された光の球が釦魔に命中そのまま倒れる。

そして鍍那の魔力の凝縮された光の球が呪詛の黒い球を吸収し呪詛も倒れる

「己と魔太郎」がいいどんな属性にも通じる最強の術『無紫の破動』が鍍那に放たれ、紫の光の球が命中し倒れ老兵達の戦いに終止符が

打たれた。

敵を倒し更に奥に進むと

敵が使ったと思われる食堂に到着し風羅はチャイナ服をイメージし術を唱えると光に包まれると紅い龍柄の入ったチャイナ

服に変わった

「ほう綺麗じゃのお、戦ってた時は鬼女のようにやったがやはり女の子じゃの」

みんなの視線が風羅に集中にすると風羅は照れくさそうだった「何よ！私だって」と華風が呪文唱えると胸もとが大きく開いた

黒地の布に金色の虎の絵柄がはいった上着に膝の上から20センチほどの

丈の短いスカートを履いている

「その服セクシーすぎるわよ」と麗魔がいい術を唱え鳳凰の絵柄があしらわれたマントに白いカクテルドレス風の服に着替えた「女三人のファッションショウなかなか楽しめたよ、食事したら先進も」と霊磁が呆れた顔で言う

先進むとダークミンと雷藻が現れた「うざったいなあ」といい雷龍が5体を一瞬で倒し奥に進むとファイアースピリット10体を魔太郎が氷結術で一挙に倒し先進むと右方向に行く道があり真っすぐ行くと大きな扉が三つあり

『三つの扉に着きし者、扉を間違えれば魂を取られるなり』という文字が石版に書かれていた

7人は迷いながらも真ん中扉に入り用心しながら進むと床に穴が空き麗魔が

落ちそうになるが回避した。

2メートルほど進むとまた床に穴が空く何回か繰り返しようやく次の扉に到着すると鹿の顔で胴体が虎奇妙な巨大な石像に囲まれた広い部屋に到着

その先の扉に進むと周りの石像が動きだし7人は四方を囲まれた。麗魔が『怒りの雷』を発動数体の石像を破壊しただけだった。

その他のメンバーも何体か破壊したがまだ半分だ「異界人との共存を望む者達よ、よく来たな、お前達はここで終わりだ」どこからかくくもった男の声が聞こえてくる「隠れてないで出てきなさい」と麗魔言つと「よかろう」そう言つと黒マントの下に髑髏と蛇の絵柄があしらわれた牧師の着るような服を着た

体のがつしりした身長が2メートル位ありそうな40代位の男が現れた。

その男からとてつもなく邪悪な氣を感じた「その男は俺に任せろ」と瞑一が突然現れた

「瞑一お前瞬氣の術を覚えたのか」と霊磁が聞く「そうだ」「ほうお前も異界人との共存望む一端の者だったんだな、殺したはずの間どもを生き返えらせたとは聞いていたがお前が蘇生させたのか」「そうだ、牙邪髏」

「ならばお前もここで死ぬ、瞑一よ、俺と戦う前にこいつらを倒さなければならぬがな、それまで高みの見物させてもらうぞ！」

黒鹿頭爐達よ！こやつ等を殺せ」「愚かななり牙邪體、黒き魔よ！我に集まり黒き光となれ」大地が激しく揺れ大地が裂ける、とてつもない巨大な黒い光の球ができ瞑一が叫ぶ『黒光破崩衝』黒い光が黒鹿頭爐を包み粉々になる「さすがだな瞑一」凄まじい魔力のぶつかり合いだ

「瞑一の奴、随分魔力があがったな」

「凄いわ、学生の頃より

段違いに上がってる」二人の動きが止まると瞑一が「人間の血を引くお前がなぜ人間との共存に反対する」

「我が一族は角がはえてて、容姿が人間とは違っていたため、人間は娘の華頭那をイジメて自殺においやった

娘はなんとか仲間にして欲しくて角を切り落としたりもしたが受けいれもらえず思い悩み魔法を唱えて自殺した、だから俺は共存反対派の組織にはいった

地上に降りたって人間の優しさに触れ共存派に賛成していたこともあったが娘の事件以来、人間への見方が変わった、おしゃべりは終わりだ、瞑一覚悟しろ」「ここだとメンバーを巻き込むから地上に移動するぞ」

そう言うと麗魔が「二人の戦いを見届けたいから私達も移動するわよ」そう言うと敵も「俺達も二人の戦いを見届けるぞ」魔力のつき

た零牙が言つと全員が地上にでる
二人の戦いは始まつていた

複数の黒い火の球が瞑一に放たれるが防御魔法で回避し反撃に転じ
無数の黒い炎の矢を放つ

その内の20数発が命中し服を溶かし肉を焦がす、しかし、牙邪體
は『ホーリーレイ』の魔法で一瞬で治癒させる「さすが共存反対派
の中で10本の指に入るメンバーの一人だな」と瞑一が言う

「そろそろ決着をつけさせてもらつぞ」と言つと二人の魔力が一拳
にあがり大地が揺れ周辺の木々や岩、土などが上空に巻き上がり天
空が黒い雲に覆われ雷が鳴る

危険を察知した麗魔は魔力を上げ『瞬氣』の魔法を唱え瞑一と牙邪
體を残し場所を移動した。

「では行くぞ牙邪體、風
よ！闇に眠りし精霊よ！

我に集い力を与えよ」と唱えると黒い光が炎を纏いながら牙邪體に
迫る

「聖なる光よ！憎悪の力よ！我に集え」

憎悪の力と聖なる力が凝縮された

黒い光の球が霊磁を襲う巨大な魔力がぶつかりあう

二人の最強魔法『風黒光と聖邪の光』はどちらも強力だ。最初は瞑
一が

押していたが徐々に牙邪體の魔力に押され瞑一の魔力が吸収され始

めた。

さらに瞑一は魔力を
上げ牙邪體も魔力を上げる。

そして数時間の死闘の末え、やや魔力のうわまつた瞑一が勝利した
上空の黒雲も消え太陽の強い光が大地を照らした

死闘を制した、麗魔の率いるメンバーは地下一階の食堂に戻ると呪
詛の意識も戻った瞑一を加え地下2階に向かうと真つ暗闇だ。

懐中電灯を荷物入れから取り出しスイッチをいれ周りを照らすと古
代象形文字のようなものが書かれ黒鹿頭爐が槍で奴隷たちを突き
刺して虐殺されている壁画が描かれていた。

そこからさらに奥に進むと地下一階と同じ大理石で造られた大広間に
でて両脇を蛇の台座が両脇に置いてあり巨大な棺が置いてあった。

魔太郎が隠し扉がないか探し両脇の蛇の台座の頭を触ると棺が鈍い
音たて後ろに引き込まれ棺の下から通路が現れた。

通路に入るとすると四方の壁が崩れ胴回りが2メートル位で体長が
20メートルはありそうな黒蛇が現れ棺が開き身長が2メートル位
の体のがっしりして

顔が青白い男がボロボロ服を着て棺からでてきた「俺を眠り妨げお
つてお前たち覚悟しろ、我は幽鬼マロヘート、大蛇どもこやつらを
八つ裂きにしてやれ」

4匹が麗魔たちを囲み一斉に襲うと麗魔が全員を『瞬氣』で一瞬に
して大蛇の後ろ側に移動し華風が『炎風破』で攻撃猛烈な炎と風と

見えない空気の刃が大蛇たちの肉と皮膚が切り裂かれ肉と皮膚の焼ける臭いがたち込め倒れた。

「さー次はあんたよ」

「ほっやるなあ、お嬢さん、だが俺は大蛇のようにはいかんぞ」

そういうといきなり猛烈な冷気が麗魔たちを襲うが華風は炎の壁で防ぎ、炎の球を作りだしマロヘートを攻撃し数分で倒した。

「思ったより簡単にたおせたわね」「さすがは華風だな、お前を弟子してよかった」と呪詛が言う

「次は地下3階ね、どんな敵が出てくるのかしらね」と麗魔はワクワクしてるようだ

「うー、俺の活躍場少ないなあ」雷が言う「その内お兄ちゃんが役立つ場面もあるわよ」と慰めるように暝が言う

「暝ーやっぱりあなたシークレット機関の調査員のようね、地下2階の食堂付近にあの場面で現れるなんて」「ばれちゃ、しかたがない、俺は共存反対派組織の一斉摘発とお前たちのバックアップを頼まれてたのさ、それより神魔慶子のはってる

共存反対派の屋敷はどうなった」「まだ調査中よ」「そろそろあそこ張って一週間経つのになんの動きもないのか」「全然よ」「そうか、先にすすもうぜ」

魔人奮戦記「神魔慶子の部隊」（前書き）

共存反対派のメンバーと

思われる。屋敷に造園業者を装い潜入し三日ほど張り込むことになり二日目の時屋敷の主である

三咲が昼間でかける

慶子の部隊の麗子があとをつけると共存反対派の幹部と思われる男と会つのを目撃する

麗子が喫茶店をでると

あとをつけてくる車に攻撃受ける。

あとをつけていた車をまいたが神話に語り継がれるアグニと遭遇し戦闘になり危機に陥るが魔獣ケルベロスに託された
破碎爪の力により本来もっている力が目覚め形勢逆転かに見えたがアグニが逃走する

その後三咲の自宅の残りの仕事を終わらせるため改めてて訪問して作業を終えた後三咲との戦闘に苦戦しながらも勝利をおさめる。

魔人奮戦記「神魔慶子の部隊」

霊磁達が防空豪跡を探索してる時

神魔慶子は魔獣の血を引く夏蛇那麗子、他2名と共存反対派と思われるメンバーの屋敷に向かっていた。

表向きは造園業者として訪問していた

慶子の率いるメンバーは各自造園技術士3級の資格をもっている。

屋敷に着きチャームをならし「香田造園の神魔です」「ご苦労さま」と40代半ばと思われる女性が顔を出す。

外見は優しいそうで上品な感じの夫人で、ショートカットの綺麗な黒髪を

しており大きな胸を強調した白いカットソーシャツに黒い薄手のジャケットを身にまとい、下は灰色ぼい薄手のズボンをはいていて、身長が160センチほどの細身の女性だ。

どうみても共存反対派の人間には見えないがとりあえず作業を始めることにした。

まずは庭の芝生の手入れをするため魔獣の血をひく麗子呼び手入れをさせ、妖精族の血を引く鏡美由紀と魔神の

血を引く甲田和魔には

草取りをやらせて慶子は

剪定作業をした。

和魔と美由紀の草取りが

2時間ほどで終了し芝生の手入れもすみ、昼休憩に入ると美由紀が「うーん本当にこの屋敷の住人て共存反対派なのかしら夫人しかい

ないようだけど」

そんな話しをしてると夫人がババロアをおぼんにのせ「みなさんお疲れ様食後のデザートにマンゴー入りのババロアいかがかしら」

甘いものにめがない美由紀が「凄い美味しいそうですね、ありがとうございます」

といいテーブルに置かれたババロアを最初にたべだす

「ふっ、ふっ、しょうがないわね」と慶子が言う

「あのご夫人の名前聞かせもらっていいですか」と和魔が聞く

「三咲よ、あら私に魅了されちゃったのお兄さん」「いや、ちょっと聞いてみただけです」と恥ずかしそうに言う

「あの… こんな広い屋敷に一人で住まわれてるんですか」と慶子が聞く

「日頃はメイドの加津美と二人きりですよ、たまに遠縁の者や友人の者を招いてホームパーティー開いたあと泊まって行くぐらいですね」

「なんか、寂しい生活ですね」

「そうでもないわよ、あら、そろそろ休憩時間も

終わりね。午後、私出かけるけど何かようがあつたら加津美に言うてね」

そう言うと20代半と思われるメイド服を着た身長165センチくらいで細身の長い黒髪の女が会釈をし

「よろしくお願いします」といいきびすを返して背を向けて部屋の方に戻った。

「あっ、加津美を呼ぶ時は中庭のテーブルにあるパソコンを立ち上げてトップメニューにある

メイド機能の呼び出し画面を使えばすぐ来てくれと思います」「もしかして加津美さんて人型アンドロイドのメイドさん」

「そうよ」それを聞いた慶子は驚きを隠せなかった「へー、動きがなめらかな」

「私も始めは普通の人間かと思ってたけどね、失礼します」といい部屋に向かった

慶子達はそれぞれの作業に戻った。

暫くすると三咲が玄関からでてきて「それじゃ出かけてきますのでよろしくお願いします、夕方までには戻ります」といい車庫の方にむかった

「麗子、尾行して」「はい」

麗子はバイクに乗り三咲の後をつける

三咲は住宅街を抜け大通りにでて右に曲がる

そのまま真っすぐ行き30分ほどで異界人地区の50番街にでた

ここは異界人地区の中で2番目に大きな歓楽街だチケット式の一日1200円の駐車場に止めて喫茶店街にでると小さなジャズの流れるバーと喫茶店をかねた店に入ると携帯をいじくりながら誰かを待

っているようだ、麗子は後ろのカウンター席で三咲の様子を伺っている。店の店長らしい50代前半の男が「ご注文は」と尋ねてきた。「カプチーノ一つ」

「カプチーノお一つですね」そう言つと珈琲豆を挽きはじめるとコーヒー豆の香ばしい香りが鼻をくすぐる。「あのお、いい豆使つてるみたいですね」「そらりやブラジルの幻と言われた貴重な品種をつかつてますからね」

そんな話しをし始めると

三咲の席に男が現れた

年は40代半ばの背の高い、がっちりした男がブランドものらしい上下のスーツを着こなしている

「またあの男だ」とマスターが小声で話す。「あの二人はマスターからみてどんな関係に見えます」

「おそらく異界人との共存をのぞまない組織の幹部と従者だろう、なんでもありの…おっと喋りすぎかな

カプチーノお待たせ」

麗子は二人の会話に耳を傾けて「三咲知ってるか

反対分子特殊調査隊の動きが活発なってるの」「知ってるわ、家にも造園業者をよそおつて4人ほど来てるわ」

麗子は思ったくまずい、ばれてる。マスターに料金を払い外にでバイクにのり慶子に報告する

「こちら麗子、慶子さん

応答願います」「どしたの麗子」「どういわけか知らないけど私達の身元がばれてるみたいなの

「わかったわ、とりあえず戻ってきて」「了解」

そう言うと麗子のバイクの後ろの車から光り輝く矢のような物が連続で放たれ麗子を襲う

750CCのバイクを巧みに操りながらなんとか、かわしたが今度は上空から

炎の玉が降り注ぐかわしながらバイクの速度を徐々に上げ危機をのりきったが今度は麗子の前に

青白い炎で覆われた

はにわに似た身長が10メートル位ありそうな巨大なモンスターが現れた

<これでもしかして神話に語りつがれたアグニとか言うモンスター>バイクを止め魔法で闘うはらを決めた。

「行くわよ、アグニ、我につどえ氷の元素よ、はっー」上空に翳した手の平に氷の粒子が集まり玉を創り放つ

とアグニに真つすぐ向かうがアグニ体に当たると吸収されてしまった

「グフッフ、なかなかの魔力だがまだまだ、だな、御主は魔獣と人間の雑種のようなだが御主の力はまだ完全に覚醒してないようだ、それでは俺には勝てん最強技である世に葬ってやるぞ、この世界にある全ての元素よ、粒子となり我につどえ」

巨大な青光りする炎の塊が上空にでき両手を上げ前に倒すと土ぼこりを巻き上げ凄いスピードで近づいてくる

かわそうと体を動かそうとするが金縛りにあつたかように体が動か

ない

悲鳴を上げるまもなく青光りするほむらが麗子の体を包む、その時、魔獣ケルベロスから授かった

破碎爪が光り輝き人の姿を保ちながら獣化してゆき

パワーが吹き出し弾き返した

青光りした玉がアグニを襲うがやはり吸収してしまったようだ

「ほう、魔獣の長からの送り物のおかげで覚醒したようだな、今回は挨拶つもりだったからのお

しかし、次は命をとる

さらばじゃ」アグニの姿が消えた

くしかし魔獣ケルベロスがああ若い魔獣との混血の女に破碎爪を渡すとは

相当な潜在能力を有してる思ってよかるあのだれぬなあ」とアグニは思った

アグニは異界人がい187番地の楼魔地区の中心部の

エクセタリセンタービルの地下11階のアジトに戻り人の姿になり

破狗蛇魔に報告した

破狗蛇魔は楼魔地区の供存反対派の一人だ、幻魔と人間の混血だ年は35歳になる「どうしたアグニ、実は魔獣と人間の混血種と戦ってまいりました」

「なるほど力量はどれ程とだ」「魔獣ケルベロスの破碎爪によって覚醒したばかりなので未知数ですがかなり手強い敵になるかも知れません」

「反対分子特殊調査隊が攻めてくるまでに倒せいいなあ」

「しかし、居場所が分かりません、反対分子特殊調査隊の本部に乗り込めと言うことですか」

「反対分子特殊調査隊の本部に乗り込むのはたやすが攻めてくるまで待つのが無難か」「こちら麗子本部応答願います」

「連絡来ないから慶子が心配してたぞ」「霊魔司令長すいません」

「三咲が自宅へ戻ったそうだ直ぐに向かえ」

「了解」麗子はバイクを飛ばし三咲の自宅に戻ったが戦闘は行われてないようだ<三咲さん私達の正体知ってるのに何故自宅に戻ったのかしら>

「麗子遅かったじゃないか」と和魔が声をかける

慶子と由美は三咲とお茶をしながら話している

三咲は麗子を見つめ「お帰りなさい」「三咲さんちよつと二人でお話したいことがあるのでちよつとついてきてくれませんか」

「ここじゃダメなのみんな私の正体知ってるんでしょ」

「それもそうか、三咲さん、なんで自宅に戻ったんですか、私達の正体知ってるのにどうしてですか」「私の家だしあなたたちから逃げる自信があるしね、あなたたちでは私の魔力には勝てないし自宅を戦闘の場にしたくないのよ、それにあなたたちも私の正体を知りながらなぜか、手だししてこないようですし、私の家からでたら敵よ、覚えてといてね」

「わからないわ、なぜ三咲さん見たいな人が共存反対派のか」

慶子が言う

「それは私を捕まえられたら教えてあげるわ、そろそろ就業時間も終わりね、また明日よろしくね、お庭の手入れ」

慶子達は三咲の自宅をでた。

本部に向かう途中炎の雨が降ってきてとてつもない轟音が響く「いたい誰よ」と上空を見上げ美由記が言い上空に飛び上がると黒装束に身を纏った三咲だ

「あれは三咲さん」テレパシーで慶子に状況を報告し由美と三咲の闘いが始まった

とてつもない魔力のぶつかりあいだ「ふっふっ驚いたはまだ十代半ばになったばりの美由紀さんがこれ程の魔力お持ちだとは思いませんでしたわ」「当たり前でしょ妖精の族の血を引く者ですからおばさんには負けませんよ」

「威勢がいいようね、これならどう」目に見えない何かが由美を襲いふつとばされた

「やったわね、お返しよ」炎の塊が三咲に当たる「きゃ〜」三咲の服を焼き尽くし三咲はマント一枚と下着姿にされた

「オバサンにしては絞まりのある体のようなね、体力が少なくなつて戦う気力無くしたら犯して上げようかしら、ふっふっ」

「口の聞き方知らないようね、どういう教育受けたの親の顔見たいわ、お仕置きしてあげる、風よ、雷雲を呼びて我に力を与えたまえ」雷雲が現れ由美の頭上より降り注ぎ由美の体を掠め服の一部がボロボロになり小降りな胸が顔をだす「きゃ〜やったわね」

「いい格好だわね、発育途上の胸だけといい形してるじゃない」由美は魔法を唱えボロボロの服を

に着替えた

「自宅にいる時と闘ってる時はまるで別人ね、二重人格もしかして」
「違つわよ」

今の私が本来の人格よ」

二人の闘いがなかなか決着がつかない慶子も闘いに参戦した「大地の精霊よ、土の槍とかし、天を付け」土の槍が伸び三咲貫きそうになるが紙一重でかわされた

「慶子さんもなかなかやるようね、雷よ！炎よ！

我に力を与えよ」と言い両手を押し出すと雷と炎が絡みあい三咲の必殺技の雷炎激が二人を襲う

「慶子さんあぶない」

轟音が響くなか美由紀は瞬気を唱え4人は一瞬にして本部に到着した。

「クソ、逃したか、まあ、よかろう明日また自宅に来るでしょうからね」

三咲は自宅に戻り中庭のテーブルに座り加津美を呼びハーブティーを持って来させ一息つくことにした

本部についた慶子達は今日のできごとを海江田隆
本部長に報告した

「しかし正体がばれてるのに明日、三咲の自宅に出向くのか」「はい、まだ庭の手入れが残ってるし、三咲さんも自宅にいる時は手だししないといってますし、仕事を途中で終わらせるのも嫌ですので……」

「わかった気よつけてな」

翌日、三咲の自宅に出向くと加津美が対応にでた

「ご苦労様です、今日も

お仕事頑張ってくださいね」と笑顔をで答え

「あつ、そうですね、今日、三咲様は一日いらっしやらないので私の方で対応しますので、ご用がありましたらなんなりとお言い付けてくださいね」

玄関口でそう対応したあと会釈をし、きびすを返して、部屋に戻った、三咲は残りの作業をし、お昼休みの時間になり、皆で中庭のテーブルにつき弁当を広げ三咲について話すことにした。

「三咲さんどこに出掛けたのですかね」と和馬が聞いてくる

美由紀が口を開き「恐らく昨日会った男と私達の対応を考えてるじゃないかな」「そうかもね」麗子が言う

「昨日、三咲さんと闘っけどかなりの魔力の持ち主よ、皆気よつけてね

三咲の自宅から出たら常に適度な緊張感もって対応するようにな」
慶子が

「はい」と答える

夕方まできつちりこなし加津美から料金を受け取り三咲の自宅をあとにする

暫く走ると上空に巨大な

魔力を感じた、とてつもない雷鳴が響き3人の乗った車を襲う

麗子はバイクを巧みに操り雷撃避け接近すると黒装束を纏った三咲だ

「三咲さん、今日は私が相手よ！」

「あなた空飛べないのに私に闘いを挑む気」

麗子はバイクに魔力を込め上空に飛び上がると獣人化し

三咲に近づくと魔力のこもった強力な拳が三咲に体にめり込む

「うっ、なかなかの打撃ね、驚いたわ、どやら

あなたをあのでたようね

さすがは魔獣ケルベロスが認めただけのことはあるわね、まだ覚醒

しただばかり、私の敵じゃないわ」言い終わると

「麗子さんいくわよ」魔力を拳に集中し打雷撃が麗子の体にめり込み一瞬身動きができなくなり、三咲の連続攻撃をまともにくらい

地上スレスレまで落下した、魔力を上げ上空まで

一挙に上昇し三咲の顎を蹴り上げる「やるじゃない」と言った瞬間には麗子の姿は三咲の頭上にあつた

急下降し手の平に魔力を集中させる龍掌破が炸裂し三咲は地上に落下身動き一つしなかったがまだ息があるようだ

暫く様子を伺うと頭から溢れだした血が体内に吸い込まれるように引いて行き目を覚ます

慶子達はぎょつとしていた「どうやら今回は負けたようね」「あのお、三咲さんて不死の人」「そうよ、今の主人に殺されて不死の術かけられてるのよ、主人が殺されたら私は土に還るのよ」「そう言う」と三咲の姿がすーっと消えた

「可愛いそんな感じがするわね」と慶子が言う

「そうかな、私なんか永遠の命に憧れるけど」と美由紀が言う

「自分から望んで不死になったらないけど殺されたあと術で不死にさせらるなんて私なんか、嫌だけど」と麗子が言う

三咲との壮絶な闘いもおわつたが妙なしこりがのこつた。

二つの魂と反対分子警備隊（前書き）

占い師である破狗蛇魔と出会い、今後のことを占ってもらい異界人共存反対派組織に誘われ、拒みはしたが殺されて肉体を焼却され魂だけを抜きとられ『魔瞑の部屋』幽閉され、脱出を試みるが失敗に終わり破狗蛇魔に屈し仲間になることを了承するが元の肉体がないので昔、逆らった魅麗の肉体に魂を移されるが破狗蛇魔に逆らった魅麗の魂とが声をかけられる。

そして麗子に破れた三咲は無限川流された魅麗の魂とともに破狗蛇魔を倒すため反対分子特務警備隊と組むことになる

二つの魂と反対分子警備隊

三咲は大学を卒業後一流企業に就職したが5年後に人間関係に疲れ退社した

その後就職活動を半年続けたが就職先が決まらず嫌気がさしたころ破狗蛇魔に出会った。

破狗蛇魔は占い師をしておりよくあたるといので異界人地区では有名だった。三咲も鑑定料金1000円を払い就職について占って貰った。

「あなたはとある組織の幹部の従者として大きな力を手に入れるだろう」

言われたとたん眠りに着いてしまった。

目を覚ますと地下室の牢獄のベッドの上に鎖に縛りつけられていた
「お目覚めのようだな」「あなたは誰なのここはどこ」

「ここは異界人街187番地の楼魔地区の中心部のエクセタリセン
タービルの地下11階の牢獄さ、

主人の破狗蛇魔がお前に興味あるらしくてね」「魔陀、後は俺に任せろ」「はい、わかりました」そう言うと踵を返しどこかに向かった

「貴方は占い師の人ですね」

「私をどうするつもり」

「俺の下で働いてみないか、妖精族の血を引くお前の魔力はそうとうな物だから世界統括するの
も夢ではない」

「残念だけど貴方の仲間になる気はもうとうないわ」

「ならば死ね」そう言うと目に見えない何かが三咲の心臓を貫いた
「ぐうわ、うっ、何したの」

意識が朦朧としてゆくなか、抵抗をし炎の矢が破狗蛇魔の頬を掠める

「魔陀こいつの魂を魔瞑の部屋に暫く閉じ込めておけ」

数時間後三咲の魂が動きだす「ここはどこ」

三咲の心を通して男の声が聞こえてきた

「そこは魔瞑の部屋だ、破狗蛇魔様の言うこ聞かないからお前の魂を俺が封じ込めたのさ」

「貴方は牢獄で見張ってた魔陀か、私の魂を貴方の力でいつまでも封じ込められるとは思わないでよ、絶対この部屋から抜け出してやる」

「その部屋から抜け出すのは無理だ破狗蛇魔様と私の魔力を合わせて封印が解けることになっている」

「そんなの関係ないわ、私の魔力をなめないでね、魂のままなら最大出力で魔力を放出することができるから貴方達の魔力を大きく超えておそらく封印が解けるはずよ」

「ならばやってみるんだな」

三咲の魂が光り輝き徐々に肥大化し真つ暗闇だった部屋がまるで太陽に照らされたように明るなる
が徐々に光りが小さくなる「どうして」

「ふっ、ふっ、その部屋の内部ではどんなに巨大な魔力が放出されようが吸収される、構造になっている、部屋をでる為には俺と破狗陀魔様の魔力か、俺達の魔力を完全に上回る外部からの仲間が現れて外から魔力を放出しなければ扉は開かない」

「仲間の居ない私は魂はこの部屋に閉じ込められたままになるのね、そんな一生は過ぎたくはないからとりあえず破狗蛇魔の部下になるわよ」「ようやく、その気になったようだな」
破狗蛇魔の勝ち誇ったような声が聞こえてくる

そして部屋の扉が開いた

「私の肉体は何処にあるの」「お前の肉体は焼却処分したよ、その代わりに昔、俺に逆らった、女の肉体にお前の魂を宿し不死の力を与えよう」と破狗魔陀が言う

そして魔陀に案内され昔三咲と同じ年位の女の肉体に魂は移された

三咲は新しい肉体を手に入れたがやはり自分の肉体と違い違和感があったが魂だけでいるよりまだ

まだ、心の中で機会を見て破狗陀魔と魔陀を倒すことを決意した。

すると自分の心に女の声が響く。「私の肉体どうかしら」「今は違和感あるけど慣れば精神的にも肉体も同化できると思うけど…あなたは誰、昔、

破狗陀魔に逆らった魅麗よ

今は私の魂は異世界の無限の川をただよってるわ

あなたと私の魂はシンクロしてるから今もってる以上の魔力を放出することができるようよ、私の魂は最終的にはあなたの魂に吸収されるけどね」

「なんか寂しい話しね、私の魂に吸収されると人格を持たないエネルギー体になるのね魅麗さん、二つの魂が共存できたらどうなるのかしら」

「三咲が混乱しちゃかもね、あなたの魂に吸収されるまでは時々、私の話し相手になって欲しいわ

無限の川に流される度に風景は変わるけど一人漂ってるのは寂しいのせめて三咲さんの魂に吸収されるまではいろいろと力になってあげるよろしくね」

二人の会話が済み三咲は意識を取り戻し破狗魔陀と魔陀に視線を走らし

「まず最初に何すればいいのかしら」「まず異界人街236に屋敷を購入しといたから引越した」

三咲はいやいやながら破狗魔陀の指示に従った

引越しに着くと驚いた
築10年は立ってそんな大きな屋敷だ「とう屋敷によっこそ、三咲
さんのお世話させてもらうヒューマノイドの加津美です
よろしく願います」

「こちらこそよろしくね」

「三咲の新しい門出のスタートね」「そうね」
随分な高待遇よね、破狗蛇魔の奴何考えてるのかしら「魅麗の声を
する

「まあいいわ、自分で安アパート借りるのも大変だし」

破狗蛇魔に殺されて不死の命を手に入れてから1年の時が過ぎたが
魅麗の声はまだ聞こえる「もう一年、かそろそろ三咲と私の魂が融
合してもいい頃なのに不思議ね」

「私は嬉しいわ、話し相手が加津美しか、いないからね、魅麗さん
が声が聞こえるとなんかほっとするしね、何故魅麗さんは破狗蛇魔
に逆らったの」

「始めの内は彼に従ってたけど色々な人達と接する内に破狗蛇魔の世
界統括に疑問を抱き始めたの」

確かに悪い魔人も人間も
いるけどみんな色々な壁を乗り越えて一生懸命生きているの見てた
ら世界統括なんて必要ない感じがしてね、でも破狗蛇魔がどういう
理由で魔人や人間を傷つけるかわからないけどね、逆らったら
肉体から私の魂だけを取りだし無限の川に落とされたの」

「そうなの」「三咲様、破狗蛇魔様から電話が入っております」「
なにかよう、破狗蛇魔」「おー、怖わ、ご機嫌ナナメだな」「当
り前でしょ、私を殺して起きながらなりたくもない不死人にしたん
だから何かよう」「俺の与えた屋敷の感想聞こうかと思つてな」「
そんなのどうでもいいでしょ、何か用事でもあるの」「今日、お前
のところにお客がくるから電話したのさ」「造園業者を装つた反対
分子特務警備隊がくるはずだから始末しろ」「加津美から聞いたわ
よ、造園業者くることは聞いてるわ、でも反対分子特務警備隊の連
中も考えたわね、そう言う経緯もありあなたたちが反対分子特務警
備隊てことを知つたのよ」「なるほど、そういうことだつたのね」
慶子が答える

実は慶子達は三咲が麗子との戦いに負けた後屋敷で見なくなったの
で破狗蛇魔の情報を得る為、行方を捜してたところに三咲から香田
造園に連絡があり屋敷に出向いてた

「それで魅麗さんの声はまだ聞こえるの、魅麗と入れ替わるわね」
「初めまして魅麗よ、私より全然若い子でうらやましいわ」

「ちなみに三咲と同じ年ぐらいですか、私は45よ、三咲は28歳
よ、私の肉体だから40半ばにみえるけどね、日常は三咲が受け答
えるするからね

日頃は私の人格は三咲の心の奥底に沈んでて三咲が呼ぶと私の魂が
受け答えるの」

「そういうことが、前、三咲さんと戦つた時まるで別人だつたから
気になつてたの」と麗子が言う

「三咲は日頃おとなしいし私が彼女に力をかすと何故か別人になる

のよ」

再び人格が入れ替わり「もう魅麗さん余計なこと
言わないでよ」「ちよっと怒った顔で言う

「あつ、はつ、はつ、なんか不思議だ」数魔が言う

「二人共仲がいいですね

、それでなんで私達を自宅に招いたんですか、理由が聞きたいです
ね」

「簡単よ、あなたたちと協力して破狗蛇魔の配下の者達を壊滅させ
たいだけよ」「わかりました」

と由里魔が力強く答えた

「強力な戦力がついたわね、破狗蛇魔達の慌てふためく姿が見たい
わ」と

魅魔が言う

「一つ問題がアグニをどう倒すよ」と麗子が言う

「確かに精霊体は物理攻撃も魔法攻撃も効かないし」由里魔が言う

「アグニを倒すには封印魔法を覚えるしかないわ
私が教えてあげる」いつの間にか三咲と魅麗の人格が入れ替わって
いる

「それって時間がかかるんじゃない」と由里子が言う

「あなたの魔力があれば一年間修業すれば大丈夫よ、彼女が封印魔法覚えるまで慶子さんと由里魔さんが中心になって頑張って」

二つの魂と反対分子警備隊（後書き）

暇潰しに読んでくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7358m/>

魔人奮戦記「嵐の予感」

2011年7月26日22時27分発行